

ソーシャル・ロボット

久木田水生

名古屋大学

名古屋経済大学「科学と人間社会 III」

- 久木田他、『ロボットからの倫理学入門』、第5章。
- 岡田美智男・松本光太郎編著、『ロボットの悲しみ』。
- シェリー・タークル、『一緒にいてもスマホ』、『つながっていても孤独』

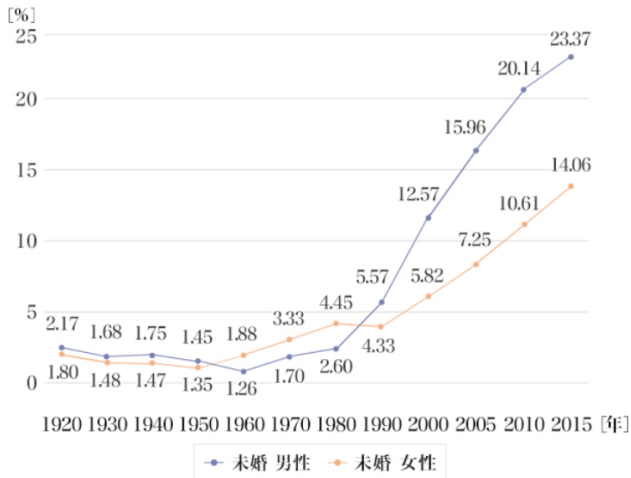
カシオポ & パトリック、『孤独の科学』

ジョン・Ｔ・カシオポ、ウィリアム・パトリック、『孤独の科学—一人はなぜ寂しくなるのか』、柴田裕之、河出書房、2018 年。

- 「孤独感」は社会的繋がりを確保するために進化的に発達した感覚。
- 身体の危険を回避するために痛み感覚が存在するようなもの。
- なので孤独感そのものは悪いものではない。
- しかし孤独感が慢性化すると、健康に深刻な被害が生じる。
- 孤独感は主観的なものであり、その人が置かれている状況とは関係がない。

生涯未婚率の推移

図1：生涯未婚率の推移



出典：「平成27年国勢調査」（総務省統計局）を加工して作成

生涯未婚率の推移

https://www.nomura.co.jp/el_borde/real80s/0011/

情報技術で孤独の問題に対処する？

- ソフトバンクの孫正義はあるインタビューで、人生における最大の苦しみは孤独であり、ソフトバンクの使命はそれを情報技術で解消することだ、と語った。
- <http://logmi.jp/39604>
- 「感情を持つ」、「愛がある」などと謳われたロボット、ペッパーは孤独の解決のための方法？
- しかし現段階でのロボットが「愛」や「感情」などを持っていないのは明らか。
- シェリー・タークルのいうかつてのロマン主義的な反応：「思考を模したものは思考かもしれないが、感情を模したものは感情ではない。愛を模したものは断じて愛ではない」（『つながっているのに孤独』、72）

- 心理学者の松本光太郎は、老人が公園の中で一人、桜の花を見上げながら腕に抱いたロボットに「きれいだねえ … 」と話しかける姿に、「痛々しさのようなもの、後ろめたさのようなもの、居たたまれなさのようなもの」を感じたと述懐する。（岡田・松本編著、『ロボットの悲しみ』、i-ii）

批判：ソーシャルロボットは欺瞞

- ロボットには愛なんかないのに、製作者がそのように宣伝するのは欺瞞だ。
- Cf.
 - Robert Sparrow, “The march of the robot dogs”, Ethics and Information Technology, 4(4), 305-318, 2002.
 - デンマーク国家生命倫理委員会「ソーシャルロボットに関する勧告」、山内繁訳、2016 年。
http://www.f.waseda.jp/s_yamauchi/Robot/docs/Recommendations_Social_Robots.html

- 嘘も方便。(帰結主義からの反論)
- 無害なフィクションとどう区別する？
- ロボットは作成者や使用者の愛情やケアを仲介している。

Cf. 久木田・神崎・佐々木、『ロボットからの倫理学入門』、第5章「AI と誠」。

「たまごっち」にイグノーベル経済学賞

- 「数百万人時間の労働をヴァーチャル・ペットの世話に費やさせた功績により … 」



By Tomasz Sienicki

投稿者自身による作品, CC 表示-継承 3.0,

<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=2169298>

批判：「ケア」という限られた資源を奪う

- 人間の愛情やケアの総量は一定であり、それをロボットに向けることは本来それが与えられるべき人間から奪うことになる。従ってそれは倫理的に問題のある行為だ。

Cf. Joanna Bryson, “Robots should be slaves”, *Close Engagements with Artificial Companions: Key Social, Psychological, Ethical and Design Issue*, Yorick Wilks (ed.), John Benjamins, chapter 11, 63-74, 2010.

- これはソーシャル・ロボットだけではなく、他人を助けることに資さないあらゆる趣味・娯楽に言えること。
- 他のことは批判されずなぜソーシャル・ロボットだけがことさらに批判されなければならないのか。
- ピーター・シンガーのように「生きる上で必要最低限以上の全ての贅沢は悪」と主張するならまだ分かる。
- しかし孤独感のもたらす被害の深刻さを考えればソーシャル・ロボットは贅沢とすら言えないかもしれない。

- さらに言えば「人間の愛情やケアの総量は一定」という前提も疑わしい。
- Bryson は、ロビン・ダンバーの「人間の認知能力的に、親しく付き合える人数は150人程度」という理論を参照している。
- しかしダンバーは、言葉を使ったコミュニケーションによって人間はその限界を突破しているとも述べている。

- ロボットに愛情を向ける人が、ロボットがいなければ人間に愛情を向けるとは限らない。反対に人間同士の関係に苦しんでいる人間がロボットに癒しを求めるのではないか。(エビデンスはないが)
- だとすればロボットによってむしろ愛情の総量が増えるのではないか？
- 「労働塊の誤謬」ならぬ「愛情塊の誤謬」。
- 人間は動物、故郷、国、野球チーム、ぬいぐるみ、神など、多くのものに愛着を感じることができる。
- 愛着を感じる対象のレパートリーが増えることは、人間の生を豊かにすることでもある。

批判：ソーシャルロボットとの関係は「真正な」関係ではない。

- 人間同士の親密な関係には、人間とロボットの関係によっては置き換えられない独自の価値がある。ロボットとの関係はその関係の劣ったイミテーションでしかない。ソーシャルロボットの普及によって、人々は安易に手に入るが劣った関係で満足してしまうようになるかもしれない。
- Cf.
 - シェリー・タークル『つながっているのに孤独——人生を豊かにするはずのインターネットの正体』、渡会圭子訳、ダイヤモンド社、2018 年。
 - シェリー・タークル『一緒にいてもスマホ——SNS と FTF』、日暮雅道訳、青土社、2017 年。

「ダーウィンのボタン」

- 人間にとって、協力的な他者を見つけることは死活を分かつ重要な課題.
- それゆえに人間は他者が協力的であるというサインに敏感に反応する心理的メカニズムを発達させてきた.
- 人間は他者から友好的なふるまいを示されると、相手を信頼し、好意を抱くようにできている.
- タークルは、この心理を利用して、テクノロジーに対する愛着を持たせることを「ダーウィンのボタンを押す」と表現する.
- 同様のことを作家の長谷敏司は「アナログ・ハック」と表現する。(長谷敏司、『Beatless』、上・下、角川文庫、2018年。)

- 人間同士の親密な関係とは異なるかもしれないが、「真正でない」とか「価値が低い」とか、言えるだろうか？人間とロボットの関係にも、重要な価値があるだろう。
- Cf.
 - 森岡正博「ペルソナ論の現代的意義」、『比較思想研究』、第40号、44-53、2013年。
 - Mark Coeckelbergh, "Robot rights? Towards a social-relational justification of moral consideration", *Ethics and Information Technology*, 12(3): 209-221, 2010.

コミュニケーションの変容

- 面と向かったリアルタイムのコミュニケーションは人間が身近な人間と協力しなければ生きていけなかった時代には不可欠だった。しかしそれはしんどいものでもある。
- 現代、私たちは多くの他者と経済活動と契約によって支え合っており、身近な他者との感情的繋がりとはそれほど必要ではない。
- それでも人間の心理はコミュニケーションを求めるようにできている。
- ICT が提供する「薄い」コミュニケーションは、コミュニケーションのしんどさを取り除き、おいしいところだけを享受させてくれるかもしれない。（タークルはこの点をこそ憂慮するのだが）
- それによって失われるものもあるが、ひょっとしたら得るものの方が多いのかもしれない。

コミュニケーションの変容

- 人類は、進化の過程で、そして文明の発展の過程で、様々な新しいコミュニケーションの方法を生み出してきた。
- そのことは他者との付き合い方、集団のあり方を変化させてきた。
- 新しいコミュニケーションの方法が生まれることで、得るものと失われるものが常にあっただろう。
- 現在のコミュニケーションのあり方が、変化させるべきでない最上のものとする理由が、あるだろうか。

指差し起源説

- 認知心理学者マイケル・トマセロによると、人間のコミュニケーションの基盤は次の二つ。
 - 他者と共通の意図を持ち、同じものに注意を向けることができるなどの社会的認知的スキル。
 - 他者を助けたい、他者と共有したいという向社会的動機。
- このような基盤の上に、まずは指差しや物まねの中で、人間のコミュニケーションは発達した。
- チョムスキー派の普遍文法論を批判。



マイケル・トマセロ、『コミュニケーションの起源を探る』、松井智子、岩田彩志訳、勁草書房、2013年。

毛づくろいからゴシップへ

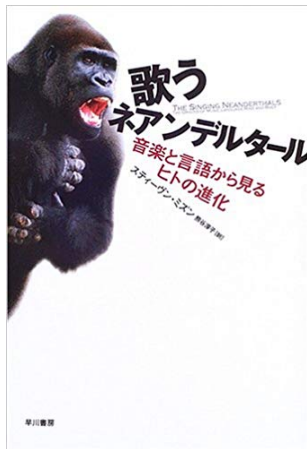
- 人類学者ロビン・ダンバーによれば人間の言語はそもそも社交的なコミュニケーションのために生まれた。
- 人間の脳の機能的限界により、人間が親しく付き合える人間の数は150人。それ以上の集団になると社会的関係の構築が困難になる。
- 言葉はより大きな集団において効率的に社交的なコミュニケーションをとることに貢献している。
- サルの毛づくろいの延長としてのゴシップ。



ロビン・ダンバー、『ことばの起源』、松浦俊輔、服部清美訳、青土社、
2016年

音楽起源説

- 認知考古学者スティーヴン・ミズンは、原言語は感情を同調させ、協力行動を促進するための音楽のようなものであったという仮説を提唱している。
- 彼はその言語を、「Holistic Multi-Modal Manipulative Musical Mimetic; Hmmmmm」と呼ぶ。
- 動物行動学者の岡ノ谷一夫も歌が言語の起源であるという説を提唱。ただし岡ノ谷は音楽の生存価値より、性選択を重視。



スティーヴン・ミズン、『歌うネアンデルタール』、熊谷淳子訳、早川書房、2006年。